

展示記録

「西田幾多郎と東北大学ゆかりの人々」展

加藤 諭・清水翔太郎・曾根原 理・村上麻佑子・
浅見 洋・井上智恵子・中嶋 優太

会期 2019年（令和元）7月1日（月）～2019年7月31日（水）

会場 東北大学史料館2階展示室

主催・共催 石川県西田幾多郎記念哲学館、東北大学史料館

協力 東北大学附属図書館

(1) 企画の趣旨と開催の経緯

石川県西田幾多郎記念哲学館では、西田幾多郎生誕の地・ゆかりの地交流事業を展開している。2019年度においては、前年度の京都大学での開催を踏まえ、西田幾多郎とゆかりのある東北大学において同事業を展開することについて、石川県西田幾多郎記念哲学館から東北大学史料館に打診があり、石川県西田幾多郎記念哲学館、東北大学史料館の主催・共催のもと、企画展、講演会を開催することとなった。1907年（明治40）、全国で三番目に創設された東北帝国大学は、西田幾多郎の恩師である、北条時敬が二代総長の時、日本の大学で初めて女子学生入学を認め、幾多郎の姪・高橋ふみも東北帝国大学で哲学を学んでいる。また東北帝国大学では1922年（大正11）に法文学部が設立される以前から、理科大学（理学部）の「科学概論」講座で田辺元、高橋里美、三宅剛一などの哲学者たちが活躍していた。加えて西田幾多郎自身も、1935年（昭和10）に講演に訪れている。こうした内容を踏まえて、学都・仙台で活躍したゆかりの人々と、現在の東北大学に受け継がれている哲学研究の特徴を、東北大学とふるさと石川に残る資料とともに紹介することとなった。本企画展を通じて、西田幾多郎と東北大学の関係また、西田に連なる人的ネットワークについて、新たな資料調査が行われ、多くの一般市民にも周知する機会となった。

(2) 展示の構成や関連行事など

展示構成は、西田幾多郎の人物紹介、西田幾多郎と関係の深い東北大学関係者、哲学に関する教育・研究をめぐる西田と東北大学の関係について20枚のパネルを作成し、パネル全体については、野家啓一東北大学名誉教授に監修頂いた。またパネルと連動した石川県西田幾多郎記念哲学館、東北大学史料館所蔵の資料を展示した。7月13日13時～15時半には片平さくらホールにおいて、野家啓一東北大学名誉教授「東北大学と科学哲学の伝統」、加藤諭東北大学史料館准教授「東北帝国大学草創期における法文学部」による講演会が開催され、その後史料館で企画展のギャラリートークが行われた。また同日10時～11時半にはキャンパスツアーが行われ、他県からの参加者もありいずれも盛況であった。会期中の参加者は1010名を数えた。

(3) 展示資料・展示解説 (パネル・キャプション) 一覧**【ごあいさつ】 (パネル展示)**

西田幾多郎は京都帝国大学の教授でしたが、彼にゆかりのある人々の多く（西田の恩師、教え子、姪、そしてライバルなど）が、学長、教員、学生として東北帝国大学に在職・在籍していました。西田自身も、1935（昭和10）年に講演に訪れています。

東北帝大の第二代総長は西田の恩師である数学者、北條時敬。その在職時、帝国大学として初めて女性の入学が認められ、後に、西田の姪・高橋ふみも東北帝大で哲学を学びました。第九代総長の高橋里美は西田の代表作『善の研究』にいち早く注目し、最初の批判論文を書いた哲学者でした。

東北帝大では1922（大正11）年に法文学部が設立される以前から、理科大学（理学部）の「科学概論」が開講していました。西田自身が科学哲学に強い関心を持っていたためか、高橋里美をはじめ「科学概論」を担当した複数の哲学者が西田ゆかりの人物です。初代担当の田辺元は、後に西田から自身の後継者として京都帝大へ招聘され、そこで西田哲学を批判しライバルとなる哲学者で、第四代担当の三宅剛一は西田の教え子でした。

本展示では、西田のふるさとに建つ石川県西田幾多郎記念哲学館と、東北大学史料館が協力し、西田とゆかりの人々についてのさまざまな資料を紹介します。貴重な資料を通して、東北大学を舞台に活躍した西田ゆかりの人々について、そして現在まで続く東北大学の哲学の伝統を知っていただけると幸いです。

末尾になりましたが、この特別展の開催にあたり、東北大学附属図書館のご協力を得ました。また、長年東北大学史料館、東北大学附属図書館の館長でもあられた野家啓一名誉教授には、解説作成にあたりご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

2019年7月

石川県西田幾多郎記念哲学館館長 浅見 洋
東北大学史料館長 安達 宏昭

A. 西田幾多郎とは？

A-1. 西田幾多郎とは？(解説パネル) →63ページ

A-2. 西田幾多郎とゆかりの人々(解説パネル) →64ページ

A-3. 西田幾多郎『善の研究』

1911年（明治44）東北大学附属図書館所蔵

西田幾多郎の出世作にして代表作。最初は東京・神田の弘道館から出版された。西田は当時ほぼ無名の学者だったが、『善の研究』は出版してすぐ学会の注目を集めた。哲学書という枠を超えて有名になったのは、出版から約10年後、作家の倉田百三が当時の高等学校生の必読書である『愛と認識との出発』で紹介したことが発端である。

1 西田幾多郎とは？



にしだ きたろう
西田幾多郎
(1870-1945)
哲学者

東洋の考え方と西洋の哲学を融合させ独自の哲学を確立した、日本を代表する哲学者。

西田幾多郎 略年譜

明治 3 (1870)	現在の石川県かほく市に生まれる。
明治 19 (1886)	北條時敬の家を訪ね、月一で数学を習う。北條が教鞭をとる石川県専門学校に入学。
明治 20 (1887)	石川県専門学校、第四高等中学校になる。
明治 23 (1890)	第四高等中学校を自主退学。
明治 24 (1891)	帝国大学文科大学哲学科選科に入学。
明治 28 (1895)	石川県尋常中学校七尾分校の主任教師。
明治 29 (1896)	第四高等学校の嘱託講師。
明治 30 (1897)	山口高等学校に赴任。校長は北條時敬。
明治 32 (1899)	第四高等学校に赴任。校長は北條時敬。
明治 42 (1909)	学習院に赴任。
明治 43 (1910)	京都帝国大学に赴任。
明治 44 (1911)	『善の研究』出版。
昭和 3 (1928)	京都帝国大学を定年退官。
昭和 15 (1940)	文化勲章受章。
昭和 20 (1945)	鎌倉にて死去。

西田幾多郎を知るキーワード

『善の研究』

西田幾多郎の出世作にして、代表作。第四高等学校（現在の金沢大学）教授時代の講義がもとになっている。出版後すぐに高橋里美は「本書は恐らく明治以後に邦人のものした最初の、また唯一の哲学書であるまいか」と評価した。現在までに通算 100 万部以上が刊行され、世界 8 か国語に翻訳されている。

「邦人のものした最初の哲学書」

西田幾多郎の人生は日本での西洋哲学の本格的な受容と軌を一にしている。

西田が生まれた 1870 年、「哲学」という日本語も生まれた。この年、西周が「復某氏書」の中で初めて「哲学」という造語を用いたとされている。その後、哲学はゆっくりと日本に根付いていった。

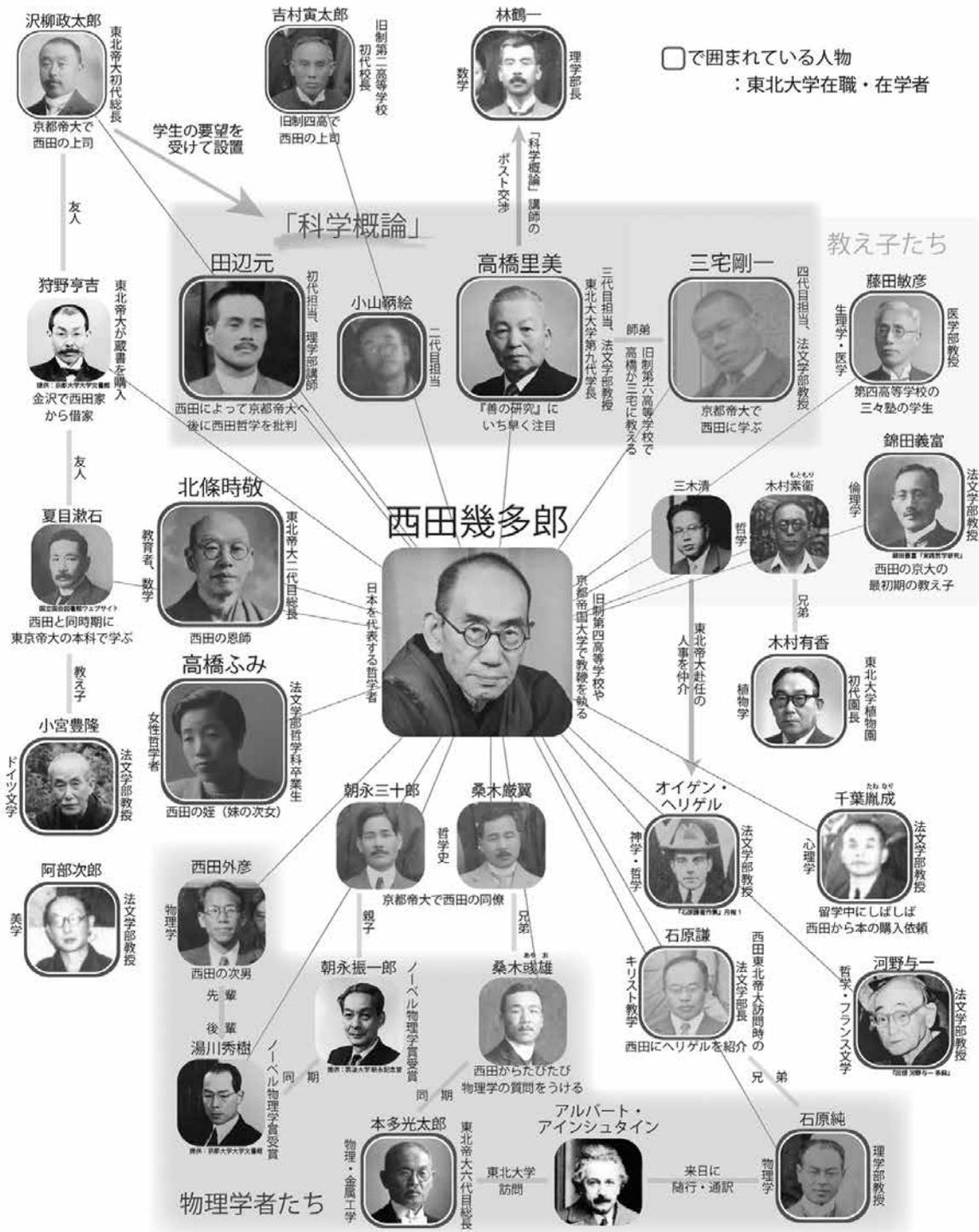
東京大学の創立（1877 年）、日本最初の哲学辞典『哲学字彙』の編纂（1884 年）、西洋人の手による哲学書や哲学史の翻訳などを経て、やがて、日本人の手で哲学史が著されるようになっていく（三宅雪嶺の『哲学涓滴』（1889 年）、大西祝の『西洋哲学史』など）。

そして、日本人が哲学史の全体についてイメージを持ち、その中で自分が取るべき方向を吟味することができるようになった、その時代に活躍し始めるのが西田である。高橋が「最初の哲学書」と評した『善の研究』が生まれた背景には、日本における西洋哲学受容のこうした準備期間があった。

京都学派

西田幾多郎が京都帝大の教授になると、西田のもとで哲学を学ぶために、東京帝大ではなくあえて京都帝大に進学する学生たちがいた。このように西田と、西田が京都帝大に招聘した田辺元の下に集まった学生たちは、のちに「京都学派」と呼ばれるようになる。

2 西田幾多郎とゆかりの人々



A-4. 『思想』第100号記念特集 1936年（昭和11）1月 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

『思想』は岩波書店が1921年（大正10）に創刊した、人文・社会科学の雑誌。現在も刊行され、岩波書店で最も古くから続く雑誌である。その記念すべき100号の執筆者は、半数以上の8名（田辺、高橋、石原純、石原謙、木下、村岡、土居、小宮）が東北大学に在職した経験を持つ。編集後記には「（『思想』の）当初からの主だった寄稿家たちに筆をそろえて書いて」もらい、「これだけの顔振れをそろえることは『思想』でなければ出来ないだろう」とあり、人文・社会科学界における東北大学の重要性がうかがえる。

B. 西田幾多郎の来仙**B-1. 西田幾多郎が仙台に来た日（パネル展示）→68ページ****B-2. 西田幾多郎の講演について（パネル展示）→69ページ****B-3. 山本良吉宛書簡**

1935年（昭和10）9月15日 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

「廿四五日より一寸東北大学にゆき三十日頃帰鎌」

東北大学行きを知らせる葉書。宛先の山本良吉は、西田が石川県専門学校生だったときからの親友で、武蔵高等学校（学校法人根津育英会武蔵学園）の校長などを勤めた教育者。当時の西田は京都の家のほかに鎌倉にも別荘を設けていたため、鎌倉に帰る旨も伝えている。鎌倉の家は、学習院が「西田幾多郎博士記念館（寸心荘）」として保存・管理している。

B-4. 西田の講演を伝える学内通知

1935年（昭和10）9月17日 東北大学史料館所蔵／総務課移管文書『講習講演会関係』

法文学部長であった石原謙から、本多光太郎総長、世良庶務課長、教官宛に出された臨時課外講演の案内通知。これまで西田の演題はわからず、講演日程についても26～28日と考えられてきたが、この資料から「歴史的事実の世界」という講演内容と、25日～27日までの日程であったことが明らかとなった。この学内通知を受け、25日には本多光太郎も西田の講演を聴講している。

B-5. 高橋里美「西田哲学について」

1936年（昭和11）1月 東北大学附属図書館所蔵／『思想』第164号

『思想』第164号、「特集 西田哲学」の巻頭に収録された論文。西田の講演「歴史的事実の世界」から4ヶ月後に刊行された。本論文では西田哲学の説く「事実の構造」について論じられており、講演の影響も想起される。第4章には「近頃の先生は絶対無を寧ろ具象的な方面に引き下ろさうとしてゐられるかの如くに見える。かくして無の場所は今は弁証法的世界とか歴史的事実的世界とか呼ばれるようになってきたが、それは私には絶対者の相対化、無限者の有限化、永遠者の時間化として映るのである。歴史的事実的関心の尊重すべきは勿論のことであるが、私はかゝる包世界的包歴史的な絶対無限永遠をどこ迄も絶対無限永遠として残置したいと思ふ。尤も実際先生がかゝる究極者を歴史的事実の世界の外に否定せられるか否かを私は知らない。この意味で私は先生の宗教哲学を特に翹望する」とある。

B-6. 細谷恒夫「西田哲学の解釈学的状況」

1936年（昭和11）年 東北大学附属図書館所蔵／『認識現象学序説』

細谷恒夫は東京帝国大学卒業後、法文学部で教育哲学を講じた。その著書『認識現象学序説』（岩波書店、1936年）には、西田の講演を受けて、それを批判した「西田哲学の解釈学的状況」が収録されている（初出は『思想』第164号）。

細谷は「西田哲学の論述の内に動いてゐる論理は、命題相互のものではなくして、その背後に見られてゐる世界の構造そのものに外ならない」とし、それが読者の理解を難解なものとしている理由の一つとしている。

C. 北條時敬

C-1. 西田幾多郎と北條時敬（パネル展示）→70ページ

C-2. 北條時敬と東北大学（パネル展示）→71ページ

C-3. 西田幾多郎書簡

1924年（大正13） 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

「拝啓来月初メ頃ニ御来宅相成候 趣奉敬承候拙生ハ此休之中ハ何處ヘモ出懸不申御来臨御待ち申ニテ 今ヨリ御免面晤之時機ヲ相楽ミ罷在候 敬具 府下王子町北宿一一八八 十二月廿二日 北条時敬」

北條と西田との面会約束の葉書。晩年まで親交があったことがうかがえる。

C-4. 北條・西田写真

1901年（明治34） 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

最前列左から、西田幾多郎、北條時敬、堀維孝、三竹欽五郎。北條と西田がともに旧制四高の教師であった頃のもの。西田は、堀、三竹とともに公認下宿・三々塾をつくり、学生の指導にあたった。

C-5. 『廓堂片影』

1931年（昭和6） 東北大学史料館所蔵

北條時敬が生前に認めた文章を採録したもので、西田幾多郎が編者としてとりまとめた。訓辞、演説、書簡、日誌及紀行、蔵書目の五部からなる。

門下生の手による「附後」からは北條の学問態度、教員時代のエピソードを垣間見ることができ、北條の人間関係も垣間見ることが出来る。

C-6. 引継関係書類

1917年（大正6）8月 東北大学史料館所蔵

北條時敬（当時総長）は、1917年8月に岡田文部大臣から突然、学習院大学転任を言い渡される。それをうけて10月に次期総長に引き継ぎを行ったが、その時のメモが本史料である。本史料からは当時、大学には敷地拡張問題、建物新営問題、組織改編、臨時理化学研究所の寄附金問題、図書館設置構想などの様々な懸案事項が存したことがわかる。

D. 田辺元**D-1. 西田幾多郎と田辺元（パネル展示）→72ページ****D-2. 田辺元がいた頃の東北帝国大学理科大学（パネル展示）→73ページ****D-3. 田辺元着任書類**

1913年（大正2） 東北大学史料館所蔵／『任免 大正二年度』自六月至八月

東北大学史料館は、東北帝国大学期の教職員の人事異動に関する『任免』文書を所蔵している。これはその中で田辺元が着任したときの書類。

1913年8月着任したことがわかる。

D-4. 田辺元退任書類

1919年（大正8） 東北大学史料館所蔵／『任免 大正八年度』自六月至八月

東北帝国大学期の教職員の人事異動に関する『任免』文書に残された田辺元の退任に関する記録。田辺が京都帝国大学に転出するにあたっては、東北帝国大学法文学部教授として慰留する動きがあったという。

1919年8月に東北帝国大学を退任したことがわかる。

D-5. 西田幾多郎宛絵葉書／田辺元差出

1922年（大正11） 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

田辺は、1922年から1923年にかけて、文部省在外研究員としてドイツに留学し、フッサールやハイデガー、オスカー・ベッカー等と交流している。この絵葉書は西田幾多郎に宛てた1922年6月8日消印のもので、ハルレの町に着き、カント協会大会に参加しての論読の感想が記載されている。

D-6. 田辺元『科学概論』

1918年（大正7） 東北大学附属図書館所蔵

新カント派哲学に基礎を置く田辺元の科学哲学に関する著作。田辺が博士論文を提出した時期の著作物で、初期の田辺の科学哲学研究のあり方がみてとれる。

D-7. 田辺元『数理哲学研究』

1925年（大正14） 東北大学附属図書館所蔵

1920年代に刊行されたものであるが、論文の内容の多くは1910年代半ばに書かれたものであり、田辺の科学哲学研究の出発点ともなっている。『科学概論』とあわせて、田辺の代表的な著作物の1つ。

3 西田幾多郎が仙台に来た日

来仙の経緯

西田の東北帝大での講演は、石原謙から書簡などで繰り返し要請があったなか、昭和 10 (1935) 年にいってようやく実現した。高橋里美によると、直接的なきっかけは「哲学の連中が発議して、一度先生ご自身の口から先生の哲学をお聴きたいものだという事になり」依頼したことによるという。

講演にあたり西田は、体力的に講演回数は二、三回、その他に座談会を一度開催、「聴講者はなるべく専門的に理解ある少数者」を石原に要望している。実際の講演は、9月25日から27日の三日間行われ、一般向けに宣伝等はなされなかったようで、おおむね西田の要望に沿った場が準備されている。

来仙中、西田は講演のほか、青葉山、八木山や松島といった仙台の名所を廻っていた。講演では自分の考えが十分に聴衆に伝わらず、苦い思いをしたようであるが、陸奥の旅を楽しむことはできたようである。

松島見物の日(28日)に西田が詠んだ歌

陸奥の 宿のとぼしげ 夜はふけて

奥の細道 よみふけるかも

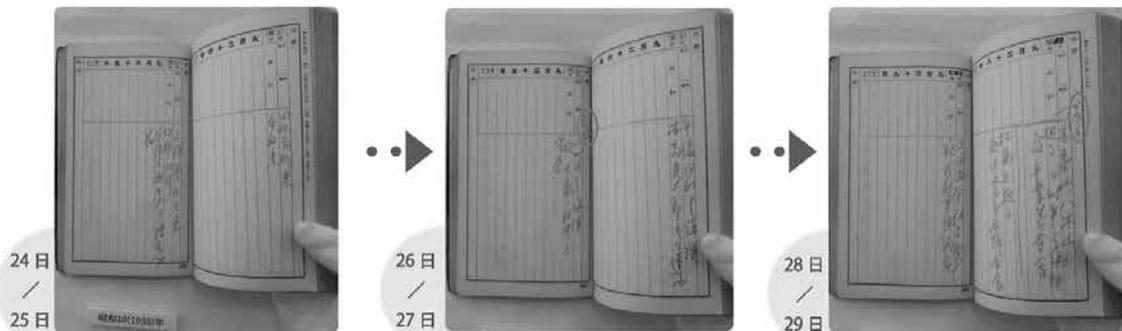
(西田外彦宛書簡)

西田幾多郎の旅程

日付	西田の動き
9/24	上野発、仙台着。 河野与一が来仙に同行。 定禅寺通ヤグラ橋本方に宿泊。
9/25	午後4時から講演。 本多光太郎総長も聴講。
9/26	午後2時半から講演。 夜、千葉胤成らと会食。
9/27	青葉山、八木山を廻る。 午後2時半から講演。 夜、卒業生と会食(歓迎懇談会)。
9/28	高橋里美らと車で松島を廻る。 夜、法文学部教授と会食。
9/29	午後0時45分仙台発。 夜9時半頃帰宅。



建設会社橋本店の洋館。西田の宿泊先は、河野与一によると「橋本組の控家の庭に臨む明治式の洋館」とされ、これは定禅寺通にあった橋本店の洋館(現在、宮城県明治百年記念事業県民の森に所在)とみられる。



西田がのこした当時の日記(写真は西田幾多郎哲学記念館提供)。西田の講演日程は、これまで翻刻された日記(全集)にもとづき26～28日とされてきたが、今回の調査で講演日程は25～27日であったことがわかった。27日・28日の欄に「前日」(赤丸部分)と書かれてあり、西田も自身の記述の矛盾に気づいていたようである。

4 西田幾多郎の講演について

西田幾多郎の講演

西田の講演内容はこれまでよくわからなかったが、今回、「歴史的事実の世界」という演題であったことが明らかとなった。後期の西田は『善の研究』で純粋経験の世界と呼んだものを「歴史的事実の世界」と捉えなおしており、講演は後期西田哲学の核心に触れる内容であったとみられる。高橋里美は講演時の西田の様子を、「形而上学そのものがそこに立っているよう」だったと表現している。

聴講したと考えられる人物

本多光太郎 阿部次郎 千葉胤成 石原謙
高橋里美 小山柄絵 三宅剛一 河野与一
木場深定 野辺地東洋 武市健人 細谷恒夫



昭和8(1933)年頃の法文学部講義棟。西田が講演した場所は不明だが、小規模の会を希望していたため、こゝで行われたか？



当時の高橋里美
(1934年)

先生は永遠の今の自己限定として世界歴史を解釈しておられるが、それは巻かれた一軸の世界地図が巻き展げられる各瞬間に同緯度の海陸が現われてくるようなものである。しかしそこに現われる海を隔てた島と島との空間的な関係よりも、むしろ時間的に延びている一つの島の纏まりの方が一層密度が高く実在性が多いのではなからうか？

高橋里美の西田を怒らせた？話

講演後の歓迎懇談会では「一つの事件」が起こった。それは高橋が阿部次郎に促され、西田に対して「ぶっきら棒の質問」をし、西田が当惑、一同白けきって重苦しい空気が流れた出来事である。高橋は晩年まで「日頃尊敬して措かないわが西田先生に向って、なぜ私はあんな失礼なことをしたのだろうか」と気に病んでいる。

講演後の反響

講演した西田は、三宅剛一への書簡で「なるだけ人の理解を得る様にと努力したつもりですが力及ばず遺憾におもひます 会後の高橋君のお話を承りましても何となく壁を隔てて語る様な思が致しました」と胸の内を明かしていた。

しかし聴講者たちは西田の講演内容に触発され、高橋里美、細谷恒夫は講演後すぐに西田哲学について論文を執筆、また高橋のいた哲学第三講座の研究室では教授と学生との面談で、西田哲学が話題の中心となっていたという。



細谷恒夫(1947～1949年頃)現象学が専門で、講演当時は新任の教育哲学担当教員であった。1949年からは教育学部で教鞭を執り、教育学部長も務めた。

5 西田幾多郎と北條時敬

西田幾多郎の恩師～北條時敬～

1886年、西田幾多郎は石川県専門学校（入学後に第四高等中学校に改称、のちの旧制四高）に補欠入学する。この入学前の数学受験に関する個人指導で、西田は北條時敬と出会うこととなる。北條は当時、東京大学を出た後、郷里の石川県専門学校の教師をしていた。西田は、入学後も北條の教えを受け、北條が再び上京すると、北條を頼りに、自らも四高を退学し上京することになる。



北條時敬（1858年～1929年）
石川県金沢市の生まれ、石川県専門学校
の教師を経て、山口高等学校、
第四高等学校、広島高等師範学校、
東北帝国大学総長を歴任した教育者

西田幾多郎とともに、北條のもとで学んだ西田の友人

鈴木大拙・・・日本の禅文化を海外に広めた仏教学者、文化勲章受章
藤岡作太郎・・・文学者として『国文学全史平安朝篇』を著す
山本良吉・・・倫理学者として、旧制三高、学習院などを歴任

北條時敬、西田幾多郎を叱責

西田幾多郎は、四高本科の文科一年生時に落第してしまい、その後理科に転科するも、退学の道を選択する。その後、北條を頼って上京を企図する西田に対し、北條は「斯ノ如キ案策ハ凡庸ノ考案ニシテ怯懦ナル仕打ナリ（そのような提案は、すぐれた提案ではなく、いくじのない態度である）」と戒めている。

を二わののなを叱へに私
受北入の入など誤ら出入が
け条た学入るは学った時う校
た先の試所学てた。には思や
頃生に験だ業し。に。は。め
初困受今遅まう、つめ
めっけられたと、先て、
てた。らた選方か東選
教。と大も選方か東選
えい学の科向ら京科

北條時敬、西田幾多郎を教師として呼び寄せる

西田幾多郎は、帝国大学文科哲学科の選科を修了後、北條時敬が校長を務めた、山口高等学校、第四高等学校の教師として呼び寄せられ、ともに教育指導や学校改革をおこなっていく。

北條が次いで、広島高等師範学校の初代校長に転出して以降は、勤務校を同じくすることはなかったものの、西田は自身の進路について、たびたび北條に相談をしていくことになる。西田幾多郎が学習院に就職する際にも、北條は就職斡旋の労をとっており、学生期から教師として大成するまで北條の影響は大きいものであった。



後年、西田幾多郎が編者となって、北條時敬の文章は『廊堂片影』にまとめられることになる。

6 北條時敬と東北大学

第二代総長として

北條時敬の東北帝国大学第二代総長としての在任期間は1913年5月から1917年8月までおよそ4年に及んでいる。

この間、東北帝国大学では、女子の大学入学、医科大学の設置（星陵キャンパスの整備）、臨時理化学研究所の設置（金属材料研究所設置の前提）、工科大学設置準備（工学部の増設）、農科大学の分離問題（東北帝国大学から北海道帝国大学の独立）など様々な課題が山積していた。北條はこれらを1つ1つ解決もしくは道筋をつけていく。

北條は、日本で初めての女子の大学入学を推し進め、医科大学設置にあたっては、医学専門部の教官をそのまま採用することをせず、あくまで研究重視の方針を採った。また、臨時理化学研究所の運営では、自ら実業家のもとへ足を運び、寄付金獲得を図った。

これらは、現在東北大学の「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」の3つの理念にもつながっていくことになる。

「本大学の主義

研究奨励ト三分科大学ノ聯絡」

※三分科大学は理科大学、医科大学、農科大学

（北條時敬が残した三代総長への「引継事項」より）

北條時敬の総長期のトピック

西暦	東北帝国大学での出来事
1913	東北帝国大学理科大学に3人の女子学生が入学、日本ではじめての女子大学生が誕生（8月）
1915	東北帝国大学医科大学設置（7月）
1915	臨時理化学研究所設置（8月）
1915	東北帝国大学ではじめて評議会が開催される（10月）
1916	評議会で理科大学に应用化学科設置決定（工学部化学工学科の前身）（5月）
1916	北條総長「東北帝国大学経営に関する意見」起草（6月）



1911年、東北帝国大学に農科大学と理科大学の2つの分科大学体制になったことで、教授会だけでなく、上位の評議会が開催されることになった。第1回評議会の議題は、文部省から諮問された大学令案の検討であった。（『評議会議事録（第壹号）』）



北條時敬



医科大学



臨時理化学研究所

医科大学の敷地や病院は宮城県などの寄附から、臨時理化学研究所の運営資金は、三共株式会社、住友財閥の住友吉左衛門などからの寄附によるものであった。

7 西田幾多郎と田辺元

田辺元

1885年～1962年、東京生まれ。旧制第一高等学校を卒業後、1904年に東京帝国大学理科大学数学科に入学、まもなく文科大学哲学科に転科し、卒業。大学院に進学した後、1913年から東北帝国大学理科大学の講師となった。

1919年からは、西田幾多郎の誘いによって、京都帝国大学文学部の助教授となり、1927年から教授。大正・昭和期の京都学派の学風を形成した。

1945年に京都大学教授を退官したが、第二次世界大戦後は、自身の学説が戦争を正当化する側面があったことについて、『懺悔道としての哲学』（1946年）を発表するなど、哲学に関する著作活動は晩年も旺盛であった。

1950年に文化勲章を受章し、翌1951年には文化功労者。享年77歳。



田辺元、京都帝国大学へ

田辺元は1918年に「数理哲学研究」を博士論文として京都帝国大学へ提出する。母校の東京帝国大学、所属の東北帝国大学ではなく、京大に博士論文を提出するよう強く勧めていたのが、西田幾多郎であった。数理哲学研究に対する西田の田辺に対する、高い評価がうかがえる。当時、東北帝国大学でも新設される法文学部の教授として、田辺を慰留する動きがあったが、翌年、西田幾多郎や波多野精一のいる京都帝国大学へ向かうことになる。



田辺は1930年に雑誌『哲学研究』に「西田先生の教を仰ぐ」を発表、西田哲学に対する根本的な批判と読み解ける内容のこの論文は、周囲に大きな波紋を広げたという。

西田哲学と田辺哲学との論争

1930年代、田辺は西田哲学を批判していく姿勢を明確にしていく。1934年に発表した「社会存在の論理」では、西田哲学が、個と全体の関係を捉えるのに具体的媒介を欠くとし、歴史的な社会存在（種）を導入する「種の論理」を提唱し、田辺哲学の独自性を打ち出していく。

一方で、この種は、民族や国家を想定したものであったことから、国家を絶対化する傾向を含むもので、第二次世界大戦後は、自身の説を自己批判していくことになる。

8 田辺元がいた頃の東北帝国大学理科大学

東北帝国大学理科大学の構成

東北帝国大学理科大学は、1907年の東北帝国大学創設から4年後の1911年に開設された。4学科＋共通学科(全12講座)構成で組織が規定されたが、同時スタートだったわけではなく、地質学科については、1年遅れ、1912年に開講している。

数学科

教授
林鶴一(数学・和算)
藤原松三郎(数学)

物理学科

教授
日下部四郎太(物理学・星学)
本多光太郎(物理学・金属工学)
愛知敬一(物理学)

化学科

教授
小川正孝(無機化学)
片山正夫(理論化学)
真島利行(有機化学)

地質学科

教授
矢部長克
(地質学・古生物学)

共通学科

教授なし(講師のみ)
英語、ドイツ語、フランス語、科学概論・哲学・倫理

長岡半太郎による理科大学設計



理科大学の制度設計の中心にいたのは、土星型原子モデルの提唱で有名な、長岡半太郎であった。彼は当時東京帝国大学の教授にあつたが、新設の東北帝国大学理科大学を魅力的な大学にすべく奔走し、自らも理科大学長として赴くつもりでいたようである。

「総長には沢柳政太郎と特定してあつたが、理学部の部長に誰をするかの問題となり、沢柳も文部省側も予を之に擬した。予も環境を考え、東北大学の設備と予算をも提示されたので行く気になつて、留学生を派遣することやら、器械購入等にも力を尽した。(中略) いざ開学準備に着手せんとするや否や、浜尾東大総長に呼び付けられ不心得を懇々談じ込まれた。(中略) 腰を落ちつけて東大に留れとの話であつた。」(昭和十一年文芸春秋所載「総長就業と廃業」)

理科大学の学事暦

田辺元が着任した1913年当時、東北帝国大学理科大学は秋入学であり、開学式は9月22日に行われている。年間3学期制を取っており、理科大学規程では、授業は開学式に先立ち9月11日開始、冬休みが12月23日から1月15日、春休みが4月1日から7日、夏休みが7月21日から9月10日であった。

授業料は年額50円(現在換算で100万円ほど)、それを3期に分けて分納することになっていた。



東北帝国大学理科大学本館 / 1913年頃

9 高橋里美と東北大学

高橋里美 (1886-1964)

山形県米沢市出身。東北大学教授で、第9代総長。子供の頃から議論好きで、加えて先生や書籍の影響により哲学研究を志したが、決定的動機について自ら「ある夜、月を見ているうちに、真善美の真諦を極めて見たいという欲求が勃然として起こった」と記している（「私の歩んだ道」）。ベックリンの絵に興味を持ち、愛読書は「レ・ミゼラブル」と伝えられる。



「大きい実務家」

高橋は昭和12年から10年間、法文学部長をつとめた。さらに定年退官後の昭和24年から9年間、文科系学部から始めて東北大学の学長に推された。「温情のうちに、極めて律儀で、胆力があり、ものごとの勘所、人情の機微を鋭くとらえる人であった。それが高橋さんを実務家的でないおおきい実務家とした」と評される（三宅剛一「高橋さんのこと」）。

「茶をすすり煙草くゆらし8年を」

総長時代を回顧し詠んだという狂歌は次のように続く。「なすこともなく椅子にかけたり」。実際は戦後復興の激動の時代だった。高橋総長は、就任翌年のイールズ事件をはじめ、数々の難題に対処した。

三選され9年間も務めるのは良くないと考え、1年早く辞任を申し出て、慰留の結果、東北大学50周年記念式典を11月から6月に繰り上げ、それを果たして辞任したという（安倍能成「高橋里美君のこと」）。

(左) イールズ事件の際に、学生たちの決議文を聞く高橋学長（右下隅で煙草を喫う人物）



(右) 50周年記念式典の際の高橋学長



10 高橋哲学と西田幾多郎

愛の哲学

高橋哲学を特徴づける言葉に「一在愛」（一つとして在ること即ち愛）がある。

高橋は「实在の真相は情感的なもの、全体として無限なる愛そのもの」と説いたという（渡辺義雄「師としての高橋先生」）。

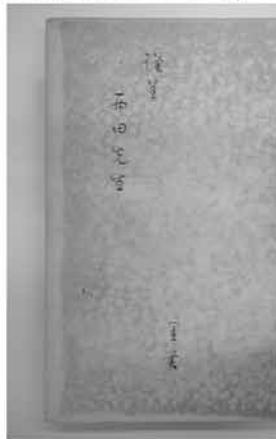
著書『包弁証法』の中にも「日本的性格」として「愛ないし和」に注目し、「私のいわゆる包弁証法の立場は一在的愛ないし和の立場に他ならない」という説明がある。この世界の真実の姿は「愛」であり、対立闘争による進歩と発展といった考えに、高橋は与しなかった。こうした「庶民的土俗的な常識」の重視は「同時代の他の体系的な哲学者とかなり趣を異にする」とも評される（三宅剛一「高橋さんのこと」）。



高橋里美自筆
「包越」

全体の立場

卒業論文以来、「全体性」の概念、ないし「全体の立場」を重視した。愛の特色は全てが一体となること、愛によって相手を包んで対立を越えること（＝「包越」）を説いた。各々の断絶を前提とする弁証法（正／反／合）に対し反発し、連続性を重視したといわれる。



高橋の主著
『全体の立場』
西田への献呈辞

西田哲学批判

高橋は東京大学大学院在籍時に、論文「意識現象の事実とその意味」で西田幾多郎を批判し、その後も論争を展開した。後年両者の違いについて、「西田先生は非連続で自分は連続、先生は禅宗的で自分は浄土真宗的だ」と自ら語ったとも伝えられる。

一方で、終生西田を尊敬したと伝えられ、欧州留学中には依頼を受けて西田門下生の務台理作（1890-1974）を世話するなど、西田との個人的親交もあった。



高橋里美書簡（西田幾多郎宛）
1926年（大正15）2月24日

E. 高橋里美

E-1. 高橋里美と東北大学 (パネル展示) →74ページ

E-2. 高橋哲学と西田幾多郎 (パネル展示) →75ページ

E-3. 高橋里美着任書類

1921年 (大正10) 年3月 東北大学史料館所蔵／『大正十年度 任免』自一月至三月
新潟高校教授の高橋里美を、東北帝国大学理学部の助教授 (科学概論担当) に任ずる書類。以下が添付されている。①履歴書、②2月12日付東北大学総長からの照会 (八田三喜新潟高校長あて)、③2月3日付八田書簡 (林鶴一東北帝国大学理学部長あて)、④高橋里美東京帝国大学卒業証書 (写)。

八田三喜 (1873-1962) は、狩野亨吉 (1865-1942) の心酔者としても知られる。③では高橋について「人物と申し学力と申し殊によい人」、転任について「創立早々教授が大学へ榮転することは学校の名誉」と記す。

E-4. 佐藤丑次郎宛絵葉書／高橋里美・久礼田益喜差出

〔大正15年 (1926)〕2月20日 東北大学史料館所蔵／佐藤丑次郎文書1-104

欧州留学中の高橋が、留学仲間の久礼田益喜 (1893-1975) と連名で、佐藤丑次郎 (東北大学法文学部初代学部長) に送ったハガキ。

ハイデルベルクに到着し、著名な哲学者リッケルト (1863-1936) の講義を受けたことなどが記されている。また当時、東北大学で教鞭をとっていたオイゲン・ヘリゲル (1884-1955) の友人アウグスト・ファウスト氏に万事世話になった等の内容が記されている (裏面は展示パネル15「ヘリゲル」ハイデルベルク大学の写真参照)。

足かけ4年にわたる留学から戻った後、高橋は理学部から法文学部に移り、さらに学部長を3回務めることになる。

E-5. 高橋里美『全体の立場』初版・謹呈本

1932年 (昭和7) 7月 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

高橋里美の代表的著作。自らの観点から、西田幾多郎の初期の哲学や、ドイツ哲学諸学派、フッサールやヘーゲルなどへの批判を試みた書。

本書に収録された「意識現象の事実と其意味 (西田氏著「善の研究」を読む)」は、高橋の最初の論文であり、西田幾多郎著『善の研究』に本格的な批判を最初に加えたものとして知られている。本書序文に「私は (西田) 先生のこの (「絶対無」の) 思想に共鳴し、かつそれに力を得、かくて先生に倣って絶対無への思弁的冒険を決意するに至ったのである」とあるように、早くから西田を尊敬し、西田哲学を強く意識して体系を構築したことが窺われる内容となっている。見返しにペン書きの謹呈辞を持つ (パネル写真参照)。

E-6. 西田幾多郎『思索と体験』初版本

1915年 (大正4) 3月 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

主に、1910年 (明治43) に京都に戻ってから書かれた論考を集めた論文集。序文には、「読み返して見ると、いずれも不満足のものが多い」「ただその立脚地に於ては、今も当時も変りがない」

などと述べられている。

「第五 高橋（里）文学士の拙著「善の研究」に対する批評に答ふ」（初出1911年）は、西田の著書『善の研究』に対する高橋里美の批評をうけ、一々回答した上で、この論考を作成した理由について「不完全にして未熟なる余の著書を弁護する為ではない」「唯（高橋）氏とここに新なる真理を研究して見たい」と記している。

E-7. 西田幾多郎宛絵葉書／高橋里美差出

〔1926年（大正15）〕 2月24日 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

留学中のハイデルベルクから送られた、近況報告の絵葉書。西田に依頼された書籍を発注したこと、リッケルト・ホフマンの両ハイデルベルク大学教授宅を訪問し、前者には西田の挨拶を伝えたことなどを記す。裏面はネッカー川越しに古城が描かれた風景画（複製添付）。

E-8. 西田幾多郎宛絵葉書／高橋里美差出

〔1927年（昭和2）〕 8月8日 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

留学中に訪れたマールブルクから送られた絵葉書。裏面に、ラーン河畔のマールブルク大学（Philipps-Universität Marburg）の写真があり（複製添付）、文面には同大学を訪問した様子について、「コーヘンやナトルプなどの講義したという教室（今はハイデッガーがしてる）も見せて貰いました」などと記している。

F. 三宅剛一

F-1. 三宅剛一と東北大学（パネル展示）→80ページ

F-2. 三宅剛一と西田哲学（パネル展示）→81ページ

F-3. 三宅剛一着任書類

1924年（大正13） 5月 東北大学史料館所蔵／『大正十三年度 任免』自五月至八月

新潟高校教授の三宅剛一を、東北帝国大学理学部の助教授（科学概論担当）に任ずる書類。以下が添付されている。①八田三喜新潟高校長から小川正孝東北帝国大学総長あて承認状、②三宅の履歴書、③4月12日付小川総長から新潟高校長あて確認状案、④三宅剛一京都帝国大学卒業証書（写）。

なお続けて、高橋里美の理学部兼勤を免ずる書類が綴じられている。これに先立つ『大正十三年度 任免（自一月至四月）』に、高橋里美に対し法文学部勤務・理学部兼勤を命ずる書類が存在する。

F-4. 西田幾多郎宛書簡／三宅剛一差出

〔年不明〕 4月3日 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

留学でフランスに二ヶ月ほど滞在した際の、独仏両国（の哲学界）の相違に関する感想を、「どうもフランス人は気にくはぬようで、ドイツの様にアットホームな気持ちになれません」「パリではドイツの学者にみるような哲学に対する情熱を感じ得ないようです」などと記す。

裏面はフランス北部ノルマンディー地域の港町フェカンの海岸の写真で、文面に「きのふからノルマンディーの海岸に来てゐます」「海は日本の北陸の海を思はせるような寂しい感じです」

などと記されている。

F-5. 西田幾多郎宛書簡／三宅剛一差出

(1930年(昭和5)) 8月2日 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

三宅は1930年(昭和5)5月から翌年8月までドイツのフライブルクに留学し、フッサールやハイデッガーに親交を結んだ。本書簡は、その終わり近くに訪れたミュンヘンから、西田に送られた葉書。裏面はデューラー画「Der Ritter (騎士)」(複製添付)。

毎日のように絵画鑑賞に励んでいる様子に加え、ハイデッガーに面会したことを、「このあいだから先生の本を読んで要点と思ふところを書いて、ハイデガアに話してやりました。前のときは時間がなくて駄目でしたが、そのうちゆっくりとまとめて話してみようと思って居ります」と記している。

三宅が、西田の『一般者の自覚体系』の要約をドイツ語訳し見せたところ、「ヘーゲルに似ているね」という「あっけない」感想を得たという。

F-6. 三宅剛一『学の形成と自然的世界』

1940年(昭和15)11月 東北大学附属図書館所蔵／石津文庫Ⅱ A4ミ5

ドイツから帰国後まもなく執筆に着手し、東北帝国大学理学部に勤務していた時期に出版された、三宅の代表作の一つ。冒頭で「西洋の古典的哲学の歴史的研究である」と宣言し、西洋哲学の全体像を歴史の中に検証していくという意図がうかがえる。哲学史的伝統の乏しかった日本の学界にとって画期的な書として、「近来の事件」と評された(下村寅太郎の書評)。本書に対し昭和18年(1943)2月、京都帝国大学から文学博士の学位が授与された(審査委員：山内得立・田辺元・天野貞祐)。

G. 高橋ふみ

G-1. 高橋ふみ(パネル展示)→82ページ

G-2. 高橋ふみ学生原簿

1926年(大正15) 東北大学史料館所蔵／『大正十五年度入学法文学部学生原簿』

法文学部入学時に作成された高橋ふみの学生原簿。東京女子大学の入学調には、性質：淡泊、品行：良、勤怠：好學心に富み勤勉とある。

G-3. 高橋ふみ「スピノザに於ける個物の認識に就て」

1934年(昭和9) 東北大学史料館所蔵／『文化』第1巻5号

『文化』は、昭和9年に法文学部文科の教官により創刊され、当時は岩波書店から刊行されていた。高橋ふみの本論文は、スピノザの個物の認識を神の認識との関係で論じ、人間の思惟の可能性と限界を考察したものである。『文化』に女性による論文が掲載されたのははじめてのことであり、学術雑誌に掲載された女性の哲学論文としても日本で最初のものとなる。

G-4. 西田幾多郎宛絵葉書／西谷啓治差出**1938年（昭和13）6月 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵**

西田の教え子の西谷啓治は、高橋ふみと同時期にフライブルクに留学した。フライブルク郊外で伝統衣装を着た人びとの描かれた本絵葉書では、ふみがフライブルクで「日本の家庭」という題で講演した様子を西田に伝えている。

G-5. 高橋ふみ訳／西田幾多郎「真善美の合一点」**1940年（昭和15） 東北大学附属図書館所蔵**

仙台国際文化協会により発行されたもので、高橋ふみによる西田論文のドイツ語訳の他、村岡典嗣、中村吉治等法文学部の教官の論文のドイツ語訳も掲載されている。「真善美の合一点」は、『芸術と道徳』（岩波書店、1923年）に収録された「自覚の立場」の一つの到達点というべき論文で、西田にとっては労苦の作であったとされる。高橋ふみは1939年10月に帰国後、12月には東北哲学会で帰朝報告をしたが、その後結核のため東京の診療所に入院し、療養中に翻訳の作業を進めた。

H. 石原謙**H-1. 石原謙（パネル展示）→83ページ****H-2. 西田幾多郎宛絵葉書／石原謙・山内得立差出****1922年（大正11）9月 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵**

石原謙と西田の教え子で後に京都帝国大学教授となる山内得立がイタリアのアッシジから差し出した絵葉書。大学の講義の休暇中に山内得立とイタリア旅行をしたことは石原の「学究生活五十年」（『石原謙著作集』第11巻所収）にも記されている。本絵葉書で石原は「希臘（ギリシャ）の方に行かうと思ふてゐます」と西田に伝えているが、希土戦争の影響で渡航できなかった。石原はギリシャ旅行を実現できなかったことについて、「私の学問にも損失であったかのように感じ、遺憾に思った」と述べている。

H-3. 西田幾多郎宛絵葉書／石原謙・小山鞆絵・千葉胤成・伊藤吉之助差出**1921年（大正10） 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵**

千葉胤成がフライブルクに来た帰りに小山鞆絵、伊藤吉之助（慶應義塾大学からの留学生）とともにハイデルベルクの石原謙を訪ねたことを西田に知らせた絵葉書。「石原老」とあるのは、この時千葉が35歳、小山は37歳であったのに対して石原は39歳と年長だったことによる。本絵葉書は若手研究者と西田の関係のみならず、後に法文学部で同僚となる人びとの横のつながりを窺い知ることができる点でも興味深い。

11 三宅剛一と東北大学

三宅剛一 (1895-1982)

岡山県浅口市出身。旧制六高(岡山)を出て、京都帝国大学に進学して西田幾多郎に師事した。高橋里美の後任として旧制新潟高校の教員となり、続いて東北帝国大学理学部に転じ、(高橋の後任として科学概論担当)、さらに法文学部に移った。戦後に、京都大学教授。1960年から4年間、日本哲学会の会長を務めた。



理学部時代

大正13年(1924)に東北帝国大学に赴任し、最初に担当した「科学概論」のポストは、教授ポストが無いため昇任は不可、自由選択科目のため受講生も乏しかった。しかし三宅にとって、哲学史への関心を育てた側面も考えられる。遺稿集の『経験的現実の哲学』の中で、「自己に甘えた節制なき主観性に陥る危険からわれわれの哲学を護るため」「過去の哲学者の認識を認識したい」と述べられた。それは当時の哲学界の状況とも関与していたかもしれない。近代哲学の伝統を欠いた日本の哲学に、哲学的伝統の地盤を築き上げるためには、西洋の哲学を実際の歴史的連関において厳正に把握することが必要であり、そうすることによってはじめて、成立の地盤と伝統を異にする西洋哲学との真の出会いが成立するといった考え方もあり得たからである。

法文学部※での後進育成

※昭和24年(1949)に法・文・経済に分離

昭和20年(1945)7月、仙台は米軍の大規模な空襲にさらされた。片平の東北帝国大学の校舎は半ば焼け、半ばは残った。三宅の拠点であった理学部の建物は、「本館全焼、私の部屋はなくなりました」という結果となった。

三宅は昭和17～21年は市内中島町の千葉胤成(満州国建国大学教授)の留守宅を住居としていた。しかし敗戦により、21年8月10日過ぎに千葉が帰国したため近くに転居。

昭和21年9月に所属を法文学部に移し、哲学研究室の中核として8年間ほど活動した。その間に滝浦静雄(東北大学)、木田元(中央大学)、新田義弘(東洋大学)といった優れた現象学者を育成し、東北大学哲学研究室を「現象学研究のメッカ」に育て上げた。

昭和29年から5年間は母校の京都大学に移り、西田幾多郎・田辺元以来の伝統を引き継いだ。

(左) 戦災をうけた理学部



(右) 法文学部の建物



12 三宅剛一と西田哲学

宗教哲学への態度

三宅は論理をつきつめるタイプの哲学者で、そこから西田幾多郎・田辺元・高橋里美といった先達を「こころの哲学」と批判した。三宅は彼らを、十分な基礎づけなしに一気に究極的なものを目指すと見なし、明証性のない論理の飛躍を許容しなかったと伝えられる。その態度は西洋哲学に対しても同様であり、たとえば次の、ヘーゲルに対する批判にあらわれている。

「ヘーゲルでは歴史はテロス（目的因：事物がそのためにあり、それに向かってなされるもの）をもつ発展と考えられて居り、私はそれには同意しかねる—或はそれはむしろ信仰であって、ヘーゲルのやうにキリスト教的信と哲学との一致を確信しない限り断言できないことのやうに思ひます」（1959年7月8日 田辺元あて書簡）

「戦争哲学」への反発

哲学の世界でも、戦時中は国策に沿った動きが見られた。三宅はそれに反発し、「かつての大東亜哲学や戦争哲学のことを思ふと、哲学が認識論的反省をもたないと、どうも信用のできないものになるやうに思はれます。西田哲学は直感的のやうでも「自覚に於ける直観と反省」以来、一つの哲学認識論乃至方法をもってみたと思はれます。」（1947年3月9日 下村寅太郎あて書簡）と回顧している。



西田幾多郎（左）と三宅剛一（右）

戦後の哲学界で

三宅は戦後、学界の将来を心配し「ある程度のタレントはあっても早熟小成、浪費とスポイルで枯れ去るのが大部分、いかにも貧乏国の情けなさです」と語ったという。

学習院大学教授(昭和33～40年)に転じた後、ある事業への参加を打診された三宅は、自分にとって第一にするべきことは、「先師の哲学の研究検討と、師が考えたことを自分で考へることによって自分の道を見出すこと」として辞退した。



三宅剛一書簡（西田幾多郎あて）
1930年（昭和5）8月ミュンヘンより

13 高橋ふみ

伯父西田幾多郎の影響と哲学

高橋ふみ(1901～1945)は西田幾多郎の姪で、東北帝国大学法文学部で学んだ哲学者である。石川県河北郡七塚村(現：かほく市)で織物業を営んでいた高橋由太郎と西田の一歳下の妹すみの次女として生まれた。

石川県立第一高等女学校を卒業した後、京都旅行で伯父の家に泊まることもあり、また西田が母寅三の看病のため金沢に赴いた際に哲学の話をし、その影響で哲学の道を志すこととなったという。

1920年(大正9)、ふみは東京女子大学に入学し、1924年に哲学科が設置されたため、英文学科から転科した。卒業論文の題目は「プラトンのイデアに就いて(パイドンを中心とした)」で、プラトンを研究対象としたのは、東京女子大学の講師であった石原謙の指導によるものであった。石原は法文学部の創設に伴い仙台に赴任したが、東京に赴いてふみの卒論指導、審査を行った。



法文学部入学時の高橋ふみ
法文学部時代は和服で
過ごしており、自由学
園に就職してから洋服
を着るようになったと
いう。

法文学部での学びと仲間

1925年に東京女子大学を卒業後、ふみは1926年に東北帝国大学法文学部に入学した。当時哲学講座には石原謙、小山鞆絵、ヘリゲルがおり、現代哲学講座の高橋里美はドイツ留学中であった。法文学部でも石原の指導を受け、1928年に高橋が帰国した後は彼にも師事した。卒業論文の題目は現在のところわかっていない。

1929年に卒業後、ふみは宮城女子師範学校で哲学を教えたが、石原の推薦もあり、自由学園に就職するため東京に移った。

東京においても法文学部の同窓生との結びつきは強く、哲学科出身者による哲学会や文科系の学問研究を志す女子同窓生による女性学士の会において研鑽を積んだようである。1934年には東北帝国大学文科会編集『文化』に「スピノザに於ける個物の認識に就て」を発表している。

ドイツ留学と西田哲学の紹介

高橋ふみは、1936年から1939年までドイツに留学し、ベルリン大学やフライブルク大学で学んでいる。フライブルクでは実存主義哲学のハイデッガーに学んだ。

留学中には、西田幾多郎の論文「形而上学的立場から見た古今東西の文化形態」の独訳をプロイセン科学アカデミーに発表するなど、西田哲学の紹介に力を注いでいる。

第二次世界大戦の開始間際に、ふみはドイツを後にするが、帰国後も「真善美の合一点」の独訳を発表している。

しかしドイツ留学中から肺病に苦しみ、ふみは43歳で世を去った。西田幾多郎が没した2週間後、1945年6月のことであった。



東北帝国大学哲学会主催
送別会の写真
(西田幾多郎記念哲学館所蔵)

14 石原謙

● キリスト教学の研究者として

石原謙（1882～1976）は、1924年から1940年まで東北帝国大学法文学部で西洋哲学史第一講座を担当し、キリスト教学で多くの業績を残した。

石原は第一高等学校卒業後、1904年に東京帝国大学文科大学史学科に入学したが、教養の基礎として哲学研究の必要性を感じたこと、教授であったケーベルの風格と徳望にひかれて哲学科に転科した。ケーベルのもとで教父哲学の研究に励み、大学院生時代には波多野精一が宗教学の講師として「原始キリスト教史」を講じており、その影響も受けた。

1919年には東京帝国大学で講師となり、古代・中世哲学史を担当するとともに、翌年には東京女子大学講師として「原始キリスト教史」も担当した。

● ハイデルベルクでの学び

石原は、1921年から2年間、ハイデルベルク大学とスイスのバーゼル大学で学んだ。同時期に留学した若手研究者は多く、後に法文学部で同僚となる小山鞆絵、千葉胤成、阿部次郎、また田辺元や三木清もいた。

ハイデルベルク大学では、石原は神学科に籍を置きながら、哲学科の教授であったリッケルトや来日前のヘリゲルとも親交を結んだ。講義以外でもヘリゲル宅では「私宅教授」、いわば読書会のようなものをして研鑽を積んだようである。

● 東北帝国大学への赴任

帰国後、東京での教員生活に行き詰まりを感じていた石原のもとに小山鞆絵などから法文学部への誘いがあった。石原は各自の研究が全くの自由であること、さらに中世思想との関連においてキリスト教を扱うことを歓迎されたことから法文学部に赴任することにしたという。1934年～37年には法文学部長を務め、1940年に東京女子大学学長に就任するため仙台を去った。



石原謙
(1940年頃)

● 西田幾多郎との関係

『西田幾多郎全集』には、西田が石原に宛てた書簡11点が掲載されている。古いものでは1924年に、石原が京大教授となっていた波多野精一を介して西田に「ラッソン氏譯ア氏の倫理学」（アリストテレス『ニコマコス倫理学』の訳書か）を贈るなど両者の交流が窺われる（『全集』360）。

西田の仙台での講演は、石原がちょうど法文学部長を務めていた時期であったが、1932年から繰り返し書簡で依頼をして実現したものであった。

● 兄石原純（1881～1947）

石原謙の兄純は、長岡半太郎やアインシュタインのもとで学んだ物理学者で、東北帝国大学理学部教授を務めた。

ハイゼンベルクの不確定性原理を西田幾多郎に伝えたと言われ、西田が「絶対矛盾的自己同一」の概念を駆使した後期の論考に影響を与えたとされる（小林敏明『西田哲学を開く』）。



石原純
(1923年頃)

15 オイゲン・ヘリゲル

ハイデルベルクから仙台へ

オイゲン・ヘリゲル(1884～1955)は、ハイデルベルク大学でリッケルトやラスクに師事して学位を取得した新カント派の哲学者である。1923年に東北帝国大学法文学部の招聘に応じて来日し、西洋哲学史第二講座を担当して哲学と古典語を講義した。東北帝国大学からは「形而上学的形式」により文学博士の学位を授与されている。

ヘリゲルは来日以前からハイデルベルクで日本人哲学者たちと読書会を開くなど交流をしており、西田の教え子の三木清は「ヘリゲル氏はその頃ハイデルベルクにいた哲学研究の日本人留学生の中心であった」(三木『読書遍歴』)と述べている。

こうした交流の中で、ヘリゲルは留学生から禅について話を聞いて関心をもっていたようで、神秘主義について満足できる答えを見出すことができず苦心する中で、法文学部から誘いがあったことは「仏教に、[禅仏教の] 沈潜の実践と神秘主義に関わり合える見通しが開かれるというだけでもすでに大変喜ばしいことだった」(『弓と禅』)と述べている。

来日後にはこうした関心にに基づき、禅と関係している日本の「道」のひとつとして、東北帝国大学と第二高等学校弓道部の師範であった阿波研造に入門し、弓道の稽古に励んだ。仙台での経験に基づきヘリゲルはドイツ帰国後に講演を行い、『弓と禅』として結実することとなった。



ハイデルベルク大学の絵葉書
(佐藤丑次郎旧蔵絵葉書)

高橋里美が初代法文学部長に宛てたもの。佐藤は法文学部の制度設計の際にハイデルベルク大学の制度を参考にしたとされる。



阿波研造
ヘリゲルは週1回阿波のもとで稽古に励んだ。

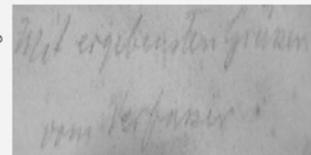
仙台における研究生活と西田幾多郎との関係

1929年、ドイツのエランゲン大学の教授に就任するために帰国するまで、ヘリゲルの仙台での生活は5年にわたった。

来日時、神戸に到着したヘリゲルを迎えに行き、仙台へ送り届けたのは、石原謙であった。これは両者がハイデルベルクでの交流により旧知の仲であることから、佐藤丑次郎法文学部長が希望したことによる。ヘリゲルと石原は週1回、パイファー編『エックハルト説教集』の読書会を行い、ドイツ神秘主義の研究を進めたという。

西田幾多郎とヘリゲルを仲介したのは、石原謙であったようだ。

1924年12月に西田から石原に宛てた書簡(『全集』363)によれば、ヘリゲルから西田のもとには1月に京都に赴くと手紙があったが、西田は「四月の学年始位の頃ならば一寸哲学会などにて話でもしておもらひしたいと思っております」と述べている。京都で両者が面会したかは定かではないが、ヘリゲルは西田に論文の抜刷を贈るなどして親交を深めていた。



西田に送られた抜刷の拡大写真
mit ergebensten grüssen
(もっとも恭順な挨拶とともに)
von Verfasser (著者より)

16 ゆかりの人たち

ケーベル

ケーベル（1848～1923）は、東京帝国大学文科大学哲学科の教授として1893年（明治26）に来日し、1914年（大正3）まで西洋哲学などを講じた。波多野精一、阿部次郎、和辻哲郎などが門下生としてあり、大正教養主義に影響を与えた。

西田幾多郎も門下生の一人だが、他の門下生がケーベルの高雅な人格に敬意を示していたのに対して、西田は「先生の教えについて今日まで何一つ実行したものがない。唯先生は私が煙草をのまぬのを見て哲学者はすべからく煙草を吸うべしとからかわれたが、今は煙草だけはのお様になった」（「ケーベル先生の追憶」（『思想』ケーベル先生追悼号）と述べている。



ケーベル
（久保勉『ケーベル先生とともに』）

錦田義富（1884～1927）

京都帝国大学で西田に学ぶ。カント、フィヒテ、ピラン、ロツェ、ナトルプなど近代哲学から現代哲学まで研究した。1923年に法文学部倫理学講座の教授となったが、1927年に病没した。

没後に編まれた遺稿論文集『実践哲学研究』（改造社、1928年）からその業績を知ることができる。



錦田義富
（『実践哲学研究』）

千葉胤成（1884～1972）

宮城県に生まれ、第二高等学校卒業後、京都帝国大学文科大学哲学科に入学した。心理学を専攻したが、西田にも学んだ。

1922年に法文学部に教授として赴任し、1940年にまで心理学講座を担当した。

固有意識を基礎とした無意識の理論を論じた他、日本芸術にも深い理解を示した。『千葉胤成著作集』全4巻からその業績を知ることができる。



千葉胤成

河野与一（1896～1984）

東京帝国大学卒業後、第三高等学校に赴任し、西田の「哲学概論」や「特殊講義」を受講した。1927年、法文学部に助教授として赴任。西洋古代中世哲学史、フランス文学、古典語を講じた。河野はライプニッツ『形而上学叙説』の訳書を西田の勧めにより刊行した。

遺族から東北大学附属図書館に寄贈された蔵書が「河野文庫」としてある。



晩年の河野与一
（『回想河野与一多麻』）

小山鞆絵（1884～1976）

東京帝国大学でケーベルに師事した。東北帝国大学には、1919年に赴任し、理学部講師として科学概論を講じていたが、1923年に法文学部の哲学講座に移った。1946年に退官するまで、カント、フィヒテ、ヘーゲルのドイツ観念論や新カント学派の哲学を講じた。



小山鞆絵

I. オイゲン・ヘリゲル

I-1. オイゲン・ヘリゲル (パネル展示) →84ページ

I-2. ヘリゲル招聘関係書類

1924年 (大正13) 東北大学史料館所蔵／『大正十三年度 任免』自一月至四月

ヘリゲルの講師嘱託に際して、法文学部長が佐藤丑次郎が総長小川正孝に提出した内申書。哲学と古典言語学の講義を週10時間担当させ、年6,600円の給金を支給したいと総長に上申し同意を得た。現在の価格では約550万円 (米価換算) であるが、阿部次郎の年俸が3,600円であったこと (竹内洋『教養派知識人の運命』) と比較すれば、高額であったことがわかる。なお、渡航費用として1,930円も支給されることとなった。

I-3. ヘリゲルの論文抜き刷り Eugen Herrigel“Emil Lask's Wertsystem”

1923年 (大正12) 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

ヘリゲルが西田に贈った論文の抜き刷り。「エミール・ラスクの価値体系－彼の遺作の記述からの試論－」と題されたもの。ラスクはヘリゲルの師であり、ハイデルベルク大学で教授を務めたが、第一世界大戦に従軍し、戦死した。ヘリゲルはラスクの遺稿をまとめ、全3巻の著作集を刊行した。

西田へ敬意を示して「もっとも恭順な挨拶とともに、著者より」とある。

J. ゆかりの人たち

J-1. ゆかりの人たち (パネル展示) →85ページ

J-2. ケーベル文庫目録

1943年 (昭和18) 東北大学附属図書館所蔵

東北大学附属図書館所蔵ケーベル文庫の目録。1923年、ケーベルは日本で病没したが、その際遺言で愛弟子であった久保勉に蔵書が贈られた。久保は1929年に法文学部に赴任し、古代哲学と古典語を講じ、ケーベルを追想して『ケーベル先生とともに』(岩波書店、1951年)を刊行している。

哲学関係の蔵書は久保の研究室にあったが、それ以外は東京の親戚の家に預けられており、戦時中疎開先を探していたところ、図書館長だった小宮豊隆の申し出もあり、1942年に附属図書館で購入した。

古典学を中心に哲学・文学関係の図書1999冊からなる。

J-3. 河野与一『続学問の曲り角』

1986年 (昭和61) 東北大学史料館所蔵

河野与一の没後、遺編を柴田治三郎 (文学部教授、ドイツ文学) らが整理編集し、1958年に刊行された『学問の曲り角』の続編として刊行したもの。「西田先生の片影」と題された一編も収録され、第三高等学校に赴任後、西田の講義に出席し、自宅を訪問するなどして交流を深めていったことなどが記されている。仙台での西田の講演についても記されており、上野駅まで迎えに行き、西田が、かつて河野が暮らした「橋本組の控家の庭に臨む明治式の洋間」を宿としたとある。

J-4. 千葉胤成自伝原稿 1952年（昭和27） 東北大学史料館所蔵／千葉胤成文書

『千葉胤成著作集4』に掲載されている自伝「加茂川」の原稿。京都帝国大学入学から助教授となり、ドイツに留学するまでを懐古したもの。著作集に掲載されていない「京都」と題された原稿も含まれており、「私にも論文を出すことをすすめられ、殊に西田、深田（康算）両教授の熱心な慫慂もありこれまでの諸論文を参考にして考察をすすめ大正八年から九年にかけて一応まとめその三月に「心理学の対象」と題し京都大学に提出した」とある。

千葉の博士論文提出を西田が後押ししていたことがわかる。

K. 東北大学における「科学概論」**K-1. 東北大学における「科学概論」の伝統（パネル展示）→90ページ****K-2. 「科学概論」の歴史的位置（パネル展示）→91ページ****K-3. 小野平八郎「東北帝大の萌芽時代」**

1924年（大正13）年12月 東北大学史料館所蔵／『自修会報』第10号

東北帝国大学理科大学の第1期生であった小野平八郎は、卒業後、東華新聞の記者となり、東北帝大草創期に関する随筆をいくつか残した。「科学概論」には特別な思い入れがあったようで、本資料だけでなく晩年にも叙述がある。それによれば、澤柳総長に「何んでも聞いてやる」といわれ、「理科の学生は思想の貧層」に困っていると答えたところ、翌学期になると田辺が招聘され、哲学史と科学概論の講義が始まったという。注文主の小野は責任を感じ、1日おきに午前8時までに田辺教室に出席することとなったが、学生は小野の他たった1人で、休むことはできなかったと回想している（随筆『お笑止いなァ』より）。一方の田辺も、聴講者が少なく張合いの無い雰囲気、「東京に帰りたい」と周囲にもらしていた（下村寅太郎「田辺先生の追憶」）。

K-4. 「科学概論」の講座設置要求

1924年（大正13） 東北大学史料館所蔵／『評議会議事録（第巻号）』

各部署の大正14年度予算要求書。理学部の講座増設の一項目に「科学概論」が挙げられている。経常費6290円を計上しており、これは同じく講座設置を要求していた「実用数学」と同額であった。その内訳が「教授一人、校費2000円」とあることから、教授一人分のポストを要求していたものであったことがわかる。この後、戦後に至るまで、理学部では予算要求に際して「科学概論」の講座設置を要求している。

K-5. Philosophie der Arithmetik : psychologische und logische Untersuchungen / von E.G. Husserl

1891年 東北大学附属図書館所蔵

フッサールの最初の著書『算術の哲学－論理的かつ心理学的研究－』（1891年）。ブレンターノの影響を受け、記述心理学の方法により、数学を基礎づけようと試みたものである。しかしながら、数学の普遍妥当性を基礎づけることの限界を感じ、方向転換をして執筆したのが、現象学の出発点である『論理学の研究』である。

K-6. 高橋里美『フッセルの現象学』 1931年(昭和6) 東北大学附属図書館所蔵

高橋里美はドイツ留学時にフライブルク大学でフッサーに学んだ。高橋は「現象学入門」や「自然と精神」の講義や現象学、「カントの純粹理性批判」の演習に参加した。本書はその時の記念ともいべきもので、「彼れの現象学を、私の立場から批判することではなくして、私の理解した限りに於て、それを成るべく忠実に紹介する」と述べている。東北大学は現象学において多くの研究成果を生み出すこととなるが、その契機となった一冊である。1931年に第一書房から刊行された。

L. 西田幾多郎と数学・自然科学**L-1. 西田幾多郎と数学(パネル展示) →92ページ****L-2. 西田幾多郎と自然科学(パネル展示) →93ページ****L-3. 西田幾多郎「コニク・セクションス」**

1939年(昭和14) 4月 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵/『図書』第39号

西田幾多郎が早くから数学や物理に興味を抱いていたことが分かるエッセイ。西田は、長沢亀之助と川北朝鄰の訳によるトッドハンタの『コニク・セクションス』を読んだと書いているが、これは上野清訳・川北朝鄰校閲の『軸式円錐曲線法』だと推定される。数学書を通して「理論というものの面白さを感じた」西田は、哲学において独自の理論を構築していくこととなる。

L-4. 突兌翰多爾(トッドハンタ)『軸式円錐曲線法』/上野清訳・川北朝鄰校閲

1886年(明治19) 石川県西田幾多郎記念哲学館蔵

原著はIsaac Todhunter "A Treatise on Plane Co-Ordinate Geometry as Applied to the Straight Line and the Conic Sections". 西田は本書と同じ東京数理書院刊行の第二版を読んだと推定される。「十六、七歳の頃であつたと思うが、今でも、どの室で、どのようにして読んだかということが思い出されるのである。」(「コニク・セクションス」)

東北大学附属図書館の狩野文庫には、この第一版が収蔵されている。旧蔵者の狩野亨吉は、第四高等学校(現在の金沢大学)の教授時代に西田家から借家していた縁で西田とも交流があった。

L-5. 西田幾多郎原稿「経験科学」

初出: 1939年(昭和14) 8月『思想』第207号 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

西田は自身の「行為的直観」の思想との類縁性から、P・W・ブリッジマンの「操作主義」の考え(概念はそれに対応する一連の操作と同義的である)に共感していた。論文「経験科学」には冒頭からブリッジマンの名がみえる。ブリッジマンは「操作主義」のアイデアを、アインシュタインの特殊相対性理論から得たが、西田はその点にも触れている。

「私は私の立場から経験科学と云ふものを論じて見ようと思ふ。私は経験的科学与云ふのも、私の所謂行為的直観と考へるのである。・・・ブリッジマンによって、之を論じて見よう。」

M. 書**M-1. 北條時敬書「遇故舊之交 意氣要愈新 處隱微之事 心迹宜愈顯 待衰朽之人 恩禮當愈隆 為内田慶三君清囑 廓堂居士書」**

石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

『菜根譚』から、人と接するときの心得を説いた一節である。内田慶三は広島県三島女子師範学校の校長などを勤めた人物と推定され、北條の教育者らしい面がうかがえる揮毫である。

M-2. 西田幾多郎書「吾こゝろ深き底あり喜も 憂の波もとゝかしと思ふ 寸心」

石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵

西田幾多郎自作の短歌。この短歌を詠んだ頃、西田は京都帝国大学の教授として有名になっていた。その一方で、家庭では妻が病臥し長男とは死別、娘たちは次々と入退院をするという、悲哀と苦労を重ねた時期であった。

17 東北大学における「科学概論」の伝統

「科学概論」の成り立ち

「科学概論」の授業は、1913（大正2）年、東北帝国大学初代総長の澤柳政太郎によって設置された。きっかけは小野平八郎（理科大学第一回生）によると、澤柳と学生の茶話会の席で、学生たちが哲学や科学概論の創設を嘆願したことにあるという。

東北帝大には門戸開放によって傍系出自の学生が多くおり、澤柳は学生たちに幅広い教養を身に付けさせるため、他大学にはない科目を創設したとみられる。



澤柳政太郎（左・1913年頃）と小野平八郎（右・1914年）。

「科学概論」を担当した歴任教員



1 田辺元
(1913～1919)



2 小山鞠絵
(1919～1921)



3 高橋里美
(1921～1924)



4 三宅剛一
(1924～1946)



5 和泉良久
(1946～1975)

その後

⑥非常勤・大内義一(1977) ⑦非常勤・吉田忠(1978) ⑧吉仲正和(1979～1992)
⑨非常勤・井原聡(1993～2006) ⑩非常勤・趙承勲(2007～2009) ⑪非常勤・初山高仁(2010～)

「科学概論」は教授ポストが無く、助教授、講師によって担当されていたため、「半講座」ともいわれた。自由選択科目で（後に教職科目となる）受講する学生数は少なく、教員たちは授業にやるせない思いを抱えていたようである。

田辺から三宅までは、西田幾多郎とも深い交流を持った哲学者である。和泉良久は下村寅太郎の教え子で、いわば西田の教え子に当たる。和泉は数学基礎論へ、その後の教員は科学史、科学技術史の分野へと研究内容が推移していった。



林鶴一（前列左から三番目・1920年）。林は理学部長の時、高橋里美に講座設置の意欲を明かしている。数学のみならず和算の研究者でもあった林は「科学概論」の先見性を見抜いていたようだ。

講座になりそこねた「科学概論」

日本で科学史、科学哲学の講座が正式に発足したのは、1951年東京大学教養学科においてであった。これは1947年からアメリカ・ハーバード大学でトーマス・S・クーンが行っていた科学史の講義の影響を受けている。しかしこの流れとは別に、東北大学では科学概論・科学史の講座設置が1921（大正10）年頃から目指され、戦後まで繰り返し概算要求で申請されていた。もし設置されていたら、画期的な取り組みとなったにちがいない。

18 「科学概論」の歴史的位置

近代における科学哲学の趨勢

東北帝国大学で「科学概論」の授業が始まった 20 世紀初頭は、ヨーロッパにおいて科学哲学が発展していった時期にあたる。同時に、数学と物理学の基盤を揺るがす新発見が相次ぎ、それらの哲学的基礎をめぐって一連の論争が惹起された「科学の危機」と呼ばれる時期でもあった。

数学

1899 年；非ユークリッド幾何学の論証（ヒルベルト）
1902 年；「集合論のパラドックス」の発見（ラッセル）
1930 年代；数学基礎論論争

物理学

1905 年；特殊相対性理論（アインシュタイン）
1915 年；一般相対性理論（アインシュタイン）
1900 年；量子概念の発見（M・プランク）
1920 年代；量子力学の形成

生物学

1931 年；『生物学の哲学的基礎』（J.S. ホールデン）

近代日本の主な科学哲学の議論

- ・田辺元『最近の自然科学』（1914）
- ・田辺『科学概論』（1918）
- ・西田幾多郎「物理現象の背後にあるもの」（1924）
- ・田辺『数理哲学研究』（1925）
- ・戸坂潤『科学方法論』（1929）
- ・戸坂『科学論』（1935）
- ・西田『論理と生命』（1936）
- ・西田『経験科学』（1939）
- ・下村寅太郎『自然哲学』（1939）
- ・三宅剛一『学の形成と自然科学的世界』（1940）
- ・下村『科学史の哲学』（1941）
- ・西田『知識の客観性について』（1943）
- ・西田『物理の世界』『論理と数理』『生命』（1944）
- ・下村『無限論の形成と構造』（1944）
- ・西田『空間』『数学の哲学的基礎づけ』（1945）
- ・三宅『数理哲学思想史』（1947）
- ・和泉良久『無限論』（1962）

そうした世界の動きのなか、近代日本の科学哲学の出発点を形作ったのが、「科学概論」の初代担当者である田辺元である。高橋里美によると田辺の影響から「科学概論的な研究が哲学界を風靡した」という。西田が京都帝大哲学講座の自身の後継者として田辺を指名したのも、田辺の「科学概論」や数理哲学研究に対する高い評価あつてのことと思われる。

その後も西田やその弟子たちが科学哲学を展開するのと同じ時期に、東北大学でも三宅剛一や和泉良久が「科学概論」の授業とともに数理哲学研究に従事した。

※赤字は東北大学関係者、青字は西田、黒字はそれ以外の著作。

受け継がれる哲学研究

現在の東北大学哲学専攻分野の研究上の特徴は、現象学、ヘーゲル研究、そして徹底した原典主義で知られる。現象学は高橋里美が留学先のフライブルクでフッサールに学んで以来、三宅剛一、滝浦静雄、野家啓一などへと継承されてきた研究分野である。またヘーゲル研究についても、初代哲学講座教授を務めた小山柄絵に始まり、鈴木健三郎、細谷貞雄、座小田豊、倫理学講座の加藤尚武など、多くの研究者が名を連ねてきた。



現在の哲学・倫理学研究室の外観。川内南キャンパスの文学研究科棟 9 階に所在。

さらに哲学文献を先人と対話すべくそれぞれの原典で読む研究姿勢も小山、高橋の頃から続く伝統とされる。こうした東北大学の哲学研究の出発点に、帝大期の理学部「科学概論」のポストはあつた。

19 西田幾多郎と数学

「哲学か、数学か…」若き日の西田

「西田が数学に堪能であつたことは、若い頃から著しかつた」というのは、生涯の友であつた鈴木大拙の言葉である。「西田は夕方薄昏くなつても、ランプなしに、紙上に書きつけた数学を能く見て、問題を解決するまで勉強したと。一所懸命にやると、暗がりにも見えるものださうだ」(『思想』270号)。

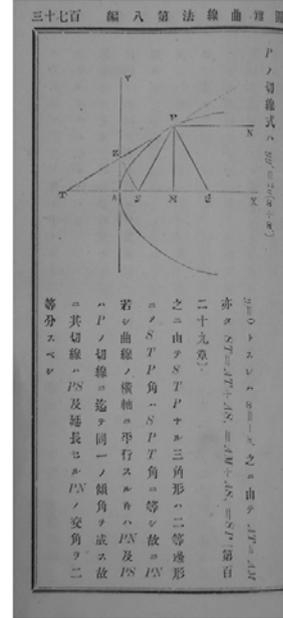
10代頃に西田は、12歳年上で新設されたばかりの東京大学数学科を卒業した北條時敬を訪ね、数学の講義を受けるようになる。やがて、北條が教鞭を執る石川県専門学校に進学すると、北條宅に寄寓もした。生涯の恩師となつた北條は、西田に数学の才能を見出していたのだろう。しかし恩師の思惑と異なり、西田は哲学を自身の専攻に選んだ。苦慮の選択であつたが、数学をはじめ物理などの自然科学への興味は生涯尽きることがなかった。



哲学を専攻にした頃の西田 (1889年、19歳)

「四高では私にも将来の専門を決定すべき時期が来た。そして多くの青年が迷ふ如く私も此問題に迷うた。特に数学に入るか哲学に入るかは、私には決し難い問題であつた。尊敬してみた或先生からは、数学に入る様に勧められた。哲学には論理的能力のみならず、詩人的想像力が必要である、さういふ能力があるか否かは分からないと云はれるのである。理に於てはいかにも当然である、私もそれを否定するだけの自信も有ち得なかつた。併しそれに関らず私は何となく乾燥無味な数学に一生を托する気にもなれなかつた。自己の能力を疑ひつゝも、遂に哲学に定めてしまつた。」

(「或教授の退職の辞」)



突兌翰多爾(トッドハンタ)著『軸式円錐曲線法』

石川県と数学

西田が生まれた頃の金沢では、西洋数学の研究・普及に尽力した和算家・関口開(ひらく)が活躍していた。東京大学数学科の設置以降、初期17年間の卒業生は、半数が石川県出身者で占められている。西田の恩師である北條もまた、関口の下で学び東京大学に進んだひとりである。

『善の研究』の中の数学

西田の初期の代表作『善の研究』の中にも数学の事例がいくつか登場する。『善の研究』の鍵語は、主客未分の「純粹経験」であるが、末尾に付加された「知と愛」と題された章も主客合一に関するもので、「知」と「愛」がともに主客合一という性格を持つ類似した精神作用だと主張している。

「数学者は自己を棄て、数理を愛し数理其者と一致するが故に、能く数理を明にすることができるのである。…数理の妙に心を奪はれ寢食を忘れて之に耽ける時、我は数理を知ると共に之を愛しつゝあるのである。」(『善の研究』第四編「宗教」第五章「知と愛」)

数学に熱中した、若き日の西田を髣髴とする一文である。

20 西田幾多郎と自然科学

西田後期の科学哲学

西田の京都帝大定年は1928年。その後の人生は、日本が満州事変から太平洋戦争へと突入していく戦時期と重なる。西田哲学の中には初期から、数学や科学に関する議論が含まれているが、科学哲学関係のテーマを主題的に扱った論文が集中的に出されたのも、この時期だった。西田はエッセイ「知識の客観性」(1933年)の中で「非常時なればなる程、我々は一面に於て落ちついて深く遠く考へねばならぬと思う」と書く。この時期だからこそ、科学哲学だったのかもしれない。

西田の科学哲学的論考の対象は、数学、物理学、生物学などにわたる。物理学の分野では、P・W・ブリッジマンの操作主義に共感を示し、西田後期思想の中心概念である「行為的直観」の存在理解と重ねている。この存在理解に関しては、次のようなプリズムの分光に関する例が好んで用いられた。

「ドウ・ブローイの云ふ如く、プリズムによる分析の前に無色の光線の中に七色があつたと云へば、あつた、併しそれは我々が実験すれば、現れるといふ意味に於てあつたのである。」(「実践と対象認識」1937年)



アインシュタイン来日と西田

1922年、物理学者のアインシュタインが、出版社である改造社の招聘で来日する。この企画は西田の提言によるものだった。西田は東北帝大教授だった石原純を改造社社長・山本実彦に紹介し、石原はアインシュタイン訪日に尽力、随行して通訳も務めた。アインシュタインが京都帝大で行った講演「いかにして私は相対性理論を作ったか」は、西田の希望に応えたものであった。



アインシュタインの東北大学訪問
左は本多光太郎総長

哲学者の周りの自然科学者

西田の周辺人物には、物理学者など自然科学の研究者も多数いた。息子・外彦は哲学を志したこともあったが、西田の説得で物理学を専攻し、湯川秀樹の先輩となった。西田の同僚だった桑木厳翼は、相対性理論の日本における最初の紹介者である桑木或雄(あやお)の兄であり、西田は厳翼を通じて或雄と交友している。同じく同僚だった朝永三十郎は、ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎の父である。西田の弟子である木村素衛(もともり)は弟が東北大学の植物学者・木村有香であり、湯川と対談もしている。

「今日久々で西田先生を訪ねた。下の室の南の縁に籐椅子によっておられた。前の籐のテーブルの上に六月号の科学思潮が置いてあった。それには巻頭に湯川秀樹君と私との対談がのっている。先生は昨夜それを読んで、その為め殆ど昨夜は一睡も出来なかったと云っておられた。」(1942年6月10日木村素衛の日記)



木村と湯川の対談掲載雑誌
(西田蔵書)